

広袴便り

会 号 13 第
報 廣 袴 町 内 会

日 行 發
日 年 月 日 20 平 成

者 任 責 行 發
郎 三 孝 杉 廣 会 會



作品展示会を終えて

初

冬の候、町内会会員の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

四月の定例会議の席上において、上杉会長から年間行事の構想として「十一月の文化の日に文化的な行事ができないものか。」との発案があり、それに基づいての計画が進められました。納涼盆踊り大会の準備に入った七月「(案) 趣味の作品を展示会に

出展して見ませんか？」を回覧させて頂きました。

その後、納涼盆踊り大会の準備、鶴川地区市民運動会(雨天中止)等の町内会行事が実施され、九月に入って作品展示会に向けての具体的活動が開始されました。作品の公募、作品の展示方法、出展品の多少について等々、その都度会議を開き意見交換し、計画を進めてきました。

1. 日時

平成十九年十一月三日 午後一時から午後五時まで
十一月四日 午前十時から午後五時まで

2. 場所

広袴会館 一階 ホール1、ホール2及び廊下

3. 出展作品の締切 十月二十日

4. 出展作品の搬入 十一月二日

5. 出展作品の返還

十一月四日 午後五時から
等が決定されました。

出展作品を公募致しましたところ、町内会会員の約二十名の皆様から出展のご依頼がありました。会場に当たる会館一



階のホール1、ホール2も一部改装され着々と準備が進められ、前日の十一月二日に皆様の作品(受付順、押し絵、ポーセリングアート、絵手紙、書道、ツールペイント、写真、版画、帆船模型、粘土細工、陶芸、油絵、水彩画、折り紙ちぎり絵)が搬入され、会場内に展示されました。皆様の作品を目の当たりにして、皆様の技術の確かさ、高さに感銘を受けました。また、町内会有志(女性)の皆様のご協力によりまして、会場内に「秋」、「文化の日」を思わせる作品展示会場にふさわしい雰囲気作りの生花、花飾り等をして頂き、大変感謝した次第でございます。展示会は予定通りに開始され、終日会員皆様のご来場を得ました。皆様の力作に対し、「素晴らしい。」「私も教わりたいので、出品者の連絡先を教えてください。」「次回は私も出品したい。」等々のお話もありました。こうして「平成十九年度広袴町内会作品展示会」は何事もなく無事終了となりました。今回が初回とは言え、それぞれ反省すべき点も多々見受けられました。ご来場された皆様からもご助言を頂

きました。今後の課題として検討していきたいと考えておりますので、不手際につきましてはご容赦御願ひ申し上げます。

最後になりましたが、納涼盆踊り大会、鶴川地区市民運動会、広袴町内会作品展示会などの行事にご協力頂きまして誠に有難うございました、広袴町内会会員みなさまのご健康、ご多幸を祈念して結びと致します。

【文化部長 本郷和朗】



どんど焼き

一月十四日、「賽の神・どんど焼き」が行われました。

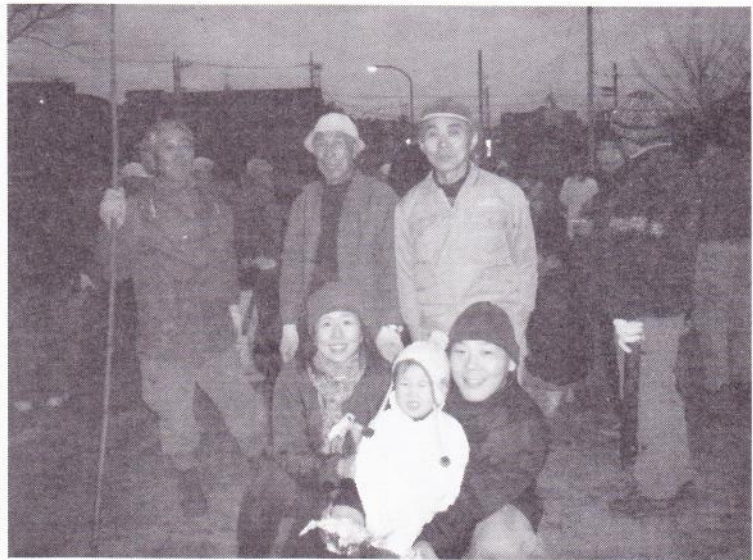
今年から会場が広袴公園に移り、気持ちも新たに新年一番目の行事がスタートしました。幸い天候にも恵まれ(風はまだまだ冷たいのですが)大勢の方々が檜の木などを手に参加されました。どんど焼きに欠かせない正月飾りや古い神札などは、当日の朝に子供会の子供達が各家を回収して廻りました。午後四時、子供達が集めてきた物を三角錐の小屋に組み込み点火が開始、どんど焼きが始まりました。徐々に火の勢いが強くなり、気がつくと思わず驚くほどの迫力で三角錐の小屋が燃え上がっていきます。日も沈んでいき、夜風が冷たく吹いてきました。火の勢いが激しく、周りの寒さを感じない程の熱気です。家で作ったお団子を三つ手に分かれた枝に刺し、火にかざして焼いて食べるのですが、複数の枝に沢山のお団子をつけている方や、一つの枝先に一個だけお団子をつけている方など様々でありました。焼いたお団子を人と交換して食べると、一年間風邪をひかずに元気に過ごせるとの言い伝えのもと、和気あいあいとした空気の中、お団子の交換が始まりました。特に子供達は初めて参加した子も多く、高々と上がる火柱の迫力や、焼き立ての温かいお団子の美



味しさを楽しんでいたようでした。大人にはお神酒も配られ、寒い冬の夜に心も身体も温まるひと時となりました。火を扱う行事であるだけに、細心の注意が必要でありましたが、町内会、消防後援会の尽力のお陰で、今年も無事にどんど焼きが終了しました。

【広報部 今井】





自主防災歳末警戒を実施

毎年恒例の自主防災歳末警戒を十二月二十九日(土)、三十日(日)(午後九時から十二時まで)の二日間で行いました。

この歳末警戒は防災・防犯・交通部だけではなく、全班長さん、委員さん、消防後援会及び消防団の方々に協力いただき、毎年年末に行っている行事で、一班三〜五人で町内を拍子木を鳴らし「火の用心」と声を出しながら巡回します。

二十九日は午後九時の打ち合わせ開始時までは雨はまだあまり降っていませんでしたが、説明終了後いざ出発と言う段階になり、かなりの雨が降ってきてしまい、一部を除いて巡回することができず、せっかくお集まりいただいたのに残念な結果となっていました。翌三十日は雨が降ることもなく八班に分かれて、かなりの冷え込みの中ではありませんでしたが、みなさん元気よく拍子木を鳴らしながら広袴町内の隅々まで巡回を行いました。

今回も年末のお忙しいところ、両日ともあまり欠席される方も少なく、参加を了解いただいた六十名あまりの方に来ていただき、何事もなく無事に終えることが出来、参加いただいた方には大変感謝しております。

最近広袴町内でも空き巣などの被害の発生が多くなっているとの警察からの情報もあり、また近隣

地区では死亡火災も発生しておりますので、防災防犯には町内の皆様ご自身でもご注意いただきますようお願い申し上げます。

【防災・防犯・交通部長 渡邊 元雄】

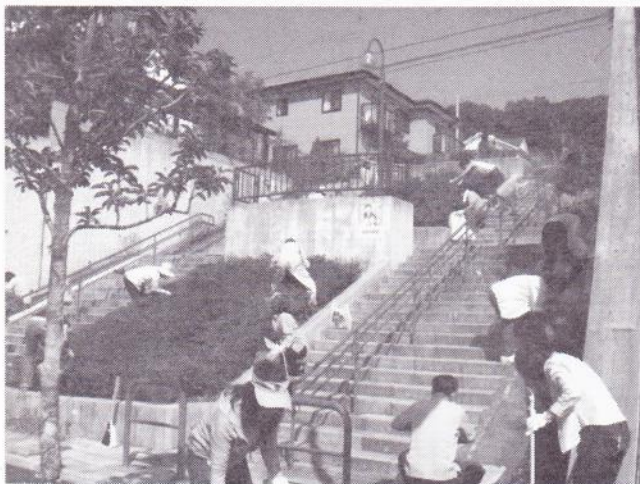


クリーンアップサタデー

十月七日と十一月二十五日の日曜日クリーンアップデーが開催されました。町内美化だけでなく、普段はあまり顔を会わさない町内の方々とコミュニケーションをとる機会になったのではないかと思います。

美しい整備された町並みでは、犯罪も比較的小さいと聞きます。みなさまも日常のご自宅周りのちょっとしたゴミ拾いや、雑草処理で気持ちよい町づくりにご協力いただきますようお願いいたします。

【広報部】



新年のご挨拶

広 袴町内会の皆様、新年明けましておめでとう
ございます。

昨年も、年金問題・食品偽装・安倍首相の退陣など様々な事があった一年でしたが、お陰様で町内会は、新年顔合わせに始まって、賽の神・盆踊り・防災訓練・クリーンアップデー・年末防犯パトロールと、恒例の行事を無事執り行なう事ができました。更に、昨年からの新たな試みの一つとして、町内会員による作品展示会も開催する事ができました。これもひとえに町内会員の皆様のご理解とご協力の賜物と思います。

今後も町内会員の皆様が参加できる行事を通じて、町内のつながりを強めていく一助となればと考えています。

町内会員の皆様の積極的なご参加をお願いしたいと思えます。

広袴地区は近年急速な開発が行なわれ、町内会員数も六百世帯を超えるまでになりましたが、開発以前より続く、日本の古き良き文化を守り受け継ぐ地域でもあります。

古くからの行事を守り伝えてきたこの地区の暮らしを尊重し、当町内会においても伝統文化を継承するお手伝いができればと考えています。

今年是非こういった方面の活動にも力を入れていきたいと考えています。

今年も安全な町、住みよい町を目指して活動を行なっていくたいと思しますので、町内会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたいと思います。

今年も一年よろしくお願い致します。

【書記 高桑正行】



桂郎句碑

出会い

袴は新しい人が増えて、様々な出会いがあると思う。人と人の出会いに、時にはその人の進路を左右するようなこともあるようだ。

ある俳句雑誌に、神蔵器うつくしの書いた文を目にした。

昼蛙どの蛙のどこ曲ろうか 石川桂郎
寒椿四五歩の距離の遠かりき 神蔵器

解説によれば、昼蛙の句は桂郎が、昭和二十四年に作ったものだという。昭和二十一年桂郎は、戦後の混乱をさけて鶴川村に疎開して、真光寺川を望む広袴と能ヶ谷の境近くに住んでいたため、もしかしたら広袴の人達で記憶している人がいるかも知れない。

桂郎の自句自解によると「山を越して、蛙を渡らうとして、私はふと妙な混乱に落ちた。勤めてみた頃の急がれるものが無かった。蛙はどこを曲がってもよかった。

(中略) 遠く田んぼの向うに私の家を眺めながら、一つ二つ物憂げに鳴いてある蛙の声を耳にしてゐた」とある。

私には、俳句の善し悪しは分からないが、冒頭の

「山を越して」とあるところに興味を持った。ある日鶴川駅から西に横たわる丘陵を見て、山とはこれだなと気づいた。しかしなぜわざわざ山を越えなければならぬのか疑問であった。鶴川駅から世田谷通りの裏手に残る津久井道の旧道に入ると、落ち葉掃きをしていた老婦人がいたので、桂郎の句を見せ「ここからあの山を越す道はありますか?」と尋ねた。老婦人は、石川桂郎の事を良く知ってをり、「桂郎さんの娘がすぐそこで働いている」と、近くの金物屋に連れて行ってくれた。生憎、その娘さんは休みだったが、金物屋の奥さんも交えて、いろいろ昔の事を聞くことが出来た。かつて駅前は一面の田圃で、梅雨時には長靴でなければ歩けず、電車に乗る人は駅で履き替えたそう。肝心の山越えの路は、能ヶ谷のお灸点(現在のかご山美術館)の脇を登っていくのだと教えられた。かつて能ヶ谷や広袴方面の人々は、この道を利用したのだという。教えられた通り坂道を登り竹林を抜け、登りきったら右へ曲がり下っていくと、教えられた神蔵器の生家があった。下りきって大通りの信号を渡ると真光寺川にかかる権現橋(この名は、この先の能ヶ谷神社の祭神が東照権現だからだろう)に出る。昭和二十四年の頃、真光寺川流域一帯は田圃が開けていたであろうから、ここから先、田圃の蛙は縦横に巡らされている。桂郎は家に帰るのに、それこそ「蛙のどこ曲ろうか」で好きに選べたのである。昼蛙、日中だからこそ、蛙も一つ二つ物憂げな鳴き声なのだ。夜蛙はうるさくて寝られないほどだった。こんな風景

は能ヶ谷だけでなく、その上流の広袴地区でも同じであった。

桂郎は明治四十二年東京の芝に生まれ、高等小学校を卒業してすぐ、家業の理髪業をついだ。昭和十二年に石田波郷の「鶴」と出会う。波郷が横光利一と親しかった縁で、横光に小説も学んだ。俳句や小説がすっかり面白くなった桂郎は、理髪業を廃業し文筆で立つ決意をする。そして十七年に発表した理髪師生活を描いた小説『剃刀日記』が評判となった。二十九年には『妻の温泉』が直木賞候補となり、四十八年に発表された『俳人 風狂列伝』では、読売文学賞を受けた。桂郎自身もこの列伝に加えられるほどの風狂の人であったようだ。

もう一人の俳人神蔵器は、昭和二年、鶴川村能ヶ谷の農家に生まれた。

「俳句で飯を食っている人が近所にいるから行ってみないか」という友人の誘いに、胸を患いブラブラしていた器が桂郎の家を訪ねたのは「あれは昭和二十二年の二月のことです。寒い夜でした。桂郎先生は突然たずねて来た私と友人のために、乏しい炭を使い切って部屋を暖めてくださいました」と語っている。最初の訪問から半月後、器は自作の俳句四、五句を持って桂郎を再訪する。その中の一句「春泥や足跡ごとの水溜り」を、桂郎はすぐさま「春泥や足跡ごとの水明り」と改めた。

この出会いが神蔵器の人生を決めた。いま器は桂郎の後を継いで「風土」の主宰となっている。後日、もう一度金物屋を訪れて桂郎の娘さんに会うこと

が出来た。桂郎の句碑は相模原市の*青柳寺にあるとのことだった。

【七組 広瀬俊雄】

*青柳寺はJ R町田駅の裏手、千寿閣の西側にある。



桂郎の道

江戸時代の広袴村

の広袴村についての歴史は、以前の「広袴便り」で掲載されたものですが、新しく居住された方々に、この町の歴史を知って頂きたく再度掲載する事にいたしました。ここでは江戸後期の広袴村の様子にしばってお話いたします。

資料は『新編武蔵風土記稿』です。略して「風土記稿」と呼ばれるこの本は、文化・文政期（十九世紀前半）に、幕府が自ら調査し記録したもので、武蔵の国全体の権威ある官撰地誌と言えます。郡ごとに各村をすべて記しており、村の中は位置・地形に始まり、村の大きさ・戸数・支配関係・高札場（お上のお触れを掲示する所）の位置・小名（コナ）・河川・社寺・旧家その他、すべての事項を挙げて説明しています。十九世紀前半の江戸近郊の農村を知る上で必携の文書です。以下『稿』の記す広袴村をそのまま紹介します。

まず位置、「広袴村は多摩郡の東南にありて木曾郷に属せり、江戸日本橋より九里半の行程なり。その四境の大概は、東の方能ヶ谷村に接し、西は真光寺村に添い、南は大蔵村、北は都築郡片平・栗木の両村なり。」とあります。次に村の大きさについては「東西およそ六町、南北三町ばかりなり、民家二十三戸散住せり。」とあり、地勢については「南北に山丘ありて、田畠はその中間にたらなり、東西はうち開けたり、土性は黒土にして畠多く田少なし。」

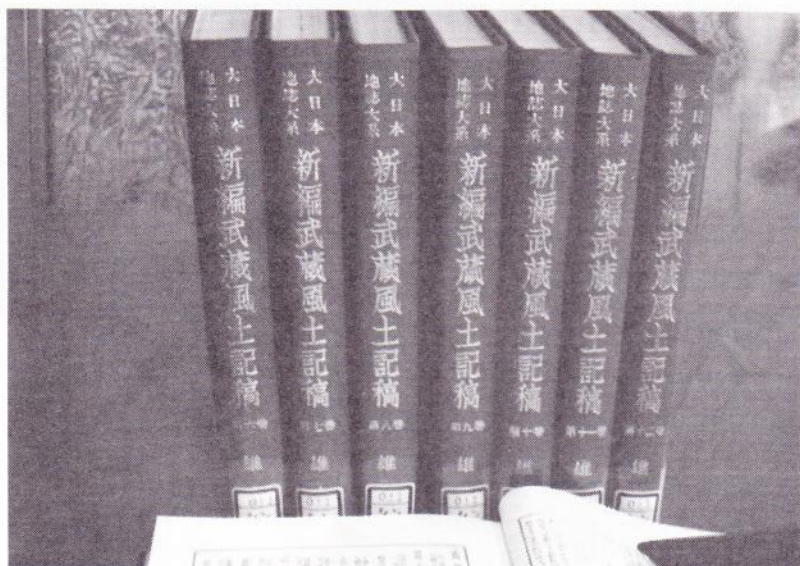
とあります。

支配関係については『小田原衆家人役帳』（戦国時代の小田原北条氏の支配関係と役高を表わす）に七貫八百五十文・小山田弥三郎が知行」と載っており、戦国時代には小田原北条氏の支配下にあったことがわかります。「当村昔より御料・私領入会（イライ）にして、今は大岡源右衛門が御代官所と、神谷富三郎が知る所なり。」とあり、江戸時代には、大岡氏代官所支配の天領（幕府直轄領）と、旗本の神谷氏の知行所の二つに、村内が分けられていたことがわかります。こういう状態の村を、歴史の方では「二給」の地と言っています。幕府直轄領側と旗本神谷氏領のそれぞれに村の役人が置かれますので、名主・組頭などの役職は複数存在することになります。

「高札場・村の中央にあり」と記されていますが、現在の広袴中央の交差点近くにあったと推定されます。「小名・上（カミ）村西の方をいう、下（シモ）東の方を言う」と書かれています。小名とは江戸時代の字（アザ）のことですが、人家の在る所、即ち集落を指します。広袴の中が、上の集落（講中）と下の集落（講中）の二つに分かれており、概ね広袴中央の線から真光寺寄りが「上」、それより東の能ヶ谷寄りが「下」だったと思われます。

川については「真光寺川・真光寺村より湧出するによりただちに名とすといへり、村の北寄りを東流して能ヶ谷に達す、村内にかかることおよそ六町、川幅九尺ばかり、この水を引きて所々の水田につづ

けり。」とあります。山については『稿』は載せていませんが、明治の村誌では、北側の栗木境いに天王山、南側の大蔵境いに大入山の二つの山名が挙げられています。神社は、「熊野社・山王社・天神社・第六天社、以上四社は何れも小社にして小名上にあり、神明社・金山社、この二社も小社にして、小名下にあり、当村の神社はすべて妙全院の進退するところなり。」と記されています。この他に天王山の頂上に天王社の小祠があったので合計七社ということになります。明治の一村一社令により、これら



はすべて合祠されて、現在の広袴神明社となります。江戸時代は神仏混着だったので、これらの小祠はすべて妙全院の住職が管理していたようです。寺院については「妙全院・除地（租税免除地）五畝ばかり、「上」にあり、不動山と号す、曹洞宗都筑郡片平村修広寺末、開山行室元察和尚寛文十二年寂す、本堂七間半に七間、本尊釈迦木の坐像、長八寸なるを安置す、不動堂・境内南の方にあり、三間に三間半、不動の長五寸ばかり、作知れず、堂前に石階六十三級あり、其の下に一の瀑布あり、天照大神宮・白山権現社・これも境内にあり、小社」と妙全院の事が記されています。不動堂の処も今と地形はかなり変わっていたようで、そこへ至るには六十三段の石段を登らなければならず、また山の裏側には滝が掛かっていたようです。

以上が『新編武蔵風土記稿』の広袴村の項のすべてです。天領側の名主は仙蔵、神谷氏知行所側には長右衛門という名主がおり、二給の地なのでふたりの名主が存在したわけです。幕末ペリー来航の数年前、嘉永三年から四年にかけて、仙蔵を筆頭とする天領側と、長右衛門を代表とする神谷知行所側が激しく対立する争議があったようです。江戸中期に旗本神谷氏の知行所が設けられて二給になるその以前、村が天領であった時期には長右衛門家が全体の名主だったようです。長右衛門家は現在の吉川正雄家で、この吉川家には戦国時代の小田原北条氏の文書が数通保存されており、戦国時代からこの家は地方の小土豪という格であったと推定されます。な

お明治以降の村の変遷は、明治十一年神奈川県南多摩郡広袴村、明治二十二年神奈川県南多摩郡鶴川村大字広袴、明治二十六年東京府南多摩郡鶴川村大字広袴、昭和三十三年町田市広袴、平成十五年西半分の地に住居表示実施で一〜四丁目の呼称が誕生しました。

【広報部長 金子欣三】

— お詫びと訂正 —

広袴便り第十二号「民生委員の活動ご紹介」の記事で、富田和子さんとありますが、正しくは宮田和子さんです。ここに謹んでお詫びし訂正させていただきます。

お知らせ

信号機、横断歩道やカーブミラーの設置について

町内会では、①広袴会館と広袴公園の間に横断歩道を設ける②都道に面するコンビニ先の横断歩道に信号機を設置する、などを町田市に要請していますが、引き続き働き掛けて行くこととしています。

町内会掲示板への原稿募集

「広袴便り」第十四号では、サークル仲間、趣味の会員募集など、町内会皆様に掲示板スペースを提供することを考えております。奮ってご応募いただき

ヒロちゃん

分冊がつあき



ますようご案内いたします。なお、連絡先は広報部長、又は、副部長としますので、ご連絡お待ちいたします。

(広報部)

編集後記

町内会の委員に就任してから十か月を経過しましたが、ボランティア活動であるとは言え、多い時間で月に四〜五回の会合参加は、とても負担に感じられます。ただし、広報紙「広袴便り」の編集に関しては、部員の皆様の積極的な参加により、楽しく紙づくりをさせて戴いています。

私どもが担当した第十二号、第十三号では、町内会行事を主催する各部の部長さんから頂戴した原稿を主体に、紙面を構成してきましたが、次号からは町内会の外郭団体である、子供会、消防団や広楽会(老人会)などにインタビューして、私ども自身の手作り原稿で紙面を飾ることも考えたいと思います。また、町内会の皆様からの積極的な投稿も期待したいと思えます。

(井上)

- 広報部長 金子欣三
- 副部長 井上好信
- 編集人 佐々木幸子
- 今井昭哉
- 松川泰重
- 佐藤裕幸
- 大矢喜昭
- 安蔵由希代
- 長谷美紀
- 谷口正
- 土屋知子
- 吉川和秀